

## 天声人語

桜の花に心が弾むのは、そこに初々しさや若さ、はなやかさを見るからだろう。しかしこの花に魅せられ、多くの歌を詠んだ西行は、自らの老いすら投影した。〈花を待つ心こそなほ昔

なれ春にはうとくなりしものを〉▼桜を待つ気持ちは昔と変わらない。それでも人の世の春に疎遠となるのは老いゆえである。〈わきて見む老木は花もあはれなり今いくたびか春にあふべき〉では、老いた木の花にも風情があり、とりわけよく見ようと詠んだ。あと何度の春に巡り合えるだろうかと▼つぼみのほころびを待つ季節になった。開花の知らせが例年より早く届いている。一方で木々の老いは各地で確実に進んでいるとも聞く。いまや桜を代表するソメイヨシノは、戦後から高度成長期にかけて植えられた木が多いからだ▼この桜は人の一生に似るかのように、40歳頃から枝の伸びに勢いがなくなる。「寿命60年説」もあるほどで60歳、70歳となれば高齢だろう。切り倒すのは忍びないと寿命を延ばす試みが各地でなされている▼東京都台東区はこの1〜2月、「若返り剪定」と称し太い枝を切っていた。若い枝を伸ばすためだ。桜は切り口から腐りやすいと「桜切るバカ、梅切らぬバカ」の言葉もあるものの、その逆をいく療法が広がりつつある。真新しい切り口を見ると、痛々しくも清々しくもある▼木に青年期があり、壮年期、高齢期がある。それぞれが一生懸命に花を咲かせようとするのは、見る方も見られる方も同じである。